

大乘涅槃經の一考察——純陀品を中心として——

加 治 洋 一

一 涅槃經がいくつつかの大乗經典を挙名していること、そのとりわけ後半のアビダルマ的側面、あるいは夥しい阿含經典や論書の反映が随所に見られること等々、先学によって夙に指摘されている。つまり、涅槃經は、当時の大乘仏教のみならず阿含・アビダルマの仏教すべてに涉って、それらを自らの素材としている。このようなことは、他に類例を見ることができないことであり、その意味を採って行くことは、涅槃經の編纂の意図、或はその成立時の状況を自ら告げることになると考えられる。

涅槃經四十巻本の原本が四世紀中には成立しており、六巻本乃至その最古層の成立が三世紀にまで遡るであろうという点については大方の研究者の一致するところである。また、その成立地を特定できないにしても、それがカシュミールと密接な関係を持っていたことについても、大筋に於て諸われている（後三十巻については暫く措く）。

さて、三四世紀のカシュミールの状況をここで詳述する余裕はないが、様々な政治的動きを措いても、該地は東西文化の交渉する要地であり、諸文化諸思想の衝突する坩堝となつて、陸統と新思潮を胚孕し育んでいたと思われる。このことと関連して忘れてならないのは、婆沙論がカシュミールで編輯され、それもカニシカ王と龍樹との中間、つまり二世紀後半に原初態が成立し、その後敷衍増補が重ねられていったということである。すると、涅槃

經と婆沙論は殆ど同じ時期、同じ地域に密接に関係しつつ成立し、しかも發展していったことになる。即ち、三四世紀のカシュミールの仏教思想、或は仏教外の諸思想を含めての状況を、涅槃經、婆沙論のいずれもがそれぞれに反映していると考えられる。このような視座から涅槃經に説かれる事柄の一つ一つを解きほぐすことによつて、当時の仏教思想をより具体的に把握することができ、翻つて、涅槃經自体の理解も深まると思われる。

二 右のような状況を踏まえつつ、その一端を考察することを試みた。今回は純陀品を取り上げ、特にそこで展開される二種の施食についての議論と仏身に關する議論とを検討したが、紙幅の都合上、本稿では二種の施食についてのみごく概略的に述べたい。

二種の施食とは、釈尊が無上正等覺を証される前に受けた供養の食餌と、般涅槃される前に受けた最後の供養の食餌との二種であり、それら二種の施の果報は、共に他の施に比べて遙かに大きい、というのである。このテーマは既に阿含に現われるが（D16、長二、etc.）そこで基調となつているのは、釈尊の純陀への思いやりである。純陀が供養した食餌によつて釈尊が亡くなられることで、純陀が誰かに非難されるかも知れない。そのことで純陀が後悔するかも知れない。そのようなことのないように、という釈尊の思いやり、純陀への慰藉が、この主題を引き出している。

この二種の施食についての議論が婆沙論卷一三二にみられる（細かく数えれば二十二にも上るこの異説の数は、ある時期に、カシュミールが二種の施食についての議論で喧紛としていたことを彷彿させる）。ここでは先ず二つの理解が言葉を尽して説明される。要をとれば、第一は、先の施食は、福田は殊勝ではないが、施主の思が殊に勝れたものであったから果も勝れており、純陀の

場合は、純陀の思は擾乱しているけれども福田が殊に勝れているから果も勝れている、というもの。第二は、より阿含に則した理解で、純陀に変悔の心を起させない為にそのように説いた、というのである。ここで整理しておかねばならないことは、この二つが共に基本的には施主の側を捕えて、或は少くともそれを考慮して解釈していることである。以下十二の説が並ぶが、それらは総て仏の側に焦点を置く。例えば第三の説は「二時俱能資益離染身故。謂食於消化時能作食事。仏は後夜成正覚時、彼食消滅。如成正覚涅槃亦爾。故説二施果無差別」という。ここでは最早純陀は視野に入っていない。以下同様にして所謂福田の側の同一性を論じる主張が列挙されるのである。

一方涅槃經では、二種の施食の果報に差別がない、という仏の宣言に対して、先ず純陀が五種の難を出す。しかし既に純陀の間それ自身が、寧ろ続いて純陀と文殊との間で交される仏身についての議論への布石としての意味合の方が強いのである。従って、ここで議論されるのは総て福田＝仏身の同一性である。即ち、純陀の詰難に対して、仏は次のように答える。

(一)如来は無量無辺阿僧祇劫の昔から煩惱身ではなく、常身、法身、金剛身である。

これは純陀の難に対する解答であると同時に、総括的な宣言とも言うべきものである。

(二)仏性を見ない者が煩惱身雜食身であつて、菩薩は食を受けて金剛三昧に入り食を消化し已った時に即ち仏性を見て正等覺を得たのだから、無煩惱身に施したということでは差別はない。

これは先に引いた婆沙論の第三の説とパラレルである。というより寧ろ婆沙論の一文を俟って、初めてここの意味が明確化して

くると言える。更に「受けて三昧に入る」という一節は、婆沙の「初受食已便入一切静慮解脱等持等至……」を想起させる。

(三)菩薩はその時四魔を破したのであり、入涅槃の今も同様である。これも婆沙の「初受食已摧破二魔……」と同根の議論。

(四)菩薩はその時未だ經を説いてはいないが、既に通達していたのであり、今はそれを衆生の為に広く説くということである。これが婆沙の「初受食已証得仏法。後受食已受用仏法」と連関すると言つても牽強に過ぎるということはなからう。

(五)如来の身は無量阿僧祇劫の昔から、真実には飲食を受けていない。声聞達の為に、「受けて正等覺を得た」と説いたが、実は食べてはいないのだ。今も同様である。

涅槃經が、般涅槃そのものを方便示現であると示し、仏身が即ち金剛身であり、無為常住である、と顕して行く面目がここにも現われている。

三 以上足早に二種の施食について概観して来た。涅槃經が、引き続き仏身論を展開する導入としてこのテーマを取り挙げていることは今更言を俟たないが、同時に、このテーマをそのような観点から論じるだけの思想的土壌が既に準備されていた、ということとも以上の検討を通じて明らかに思ったかと思われる。つまり、そのような観点からの二種施食についての議論が澎湃として起っており、そのことの反映が一方では婆沙論に実に十四もの異説として現われ、他方では六巻から四十巻への思想的展開の過程で涅槃經に取り込まれていったと考えられるのである。

以上のような作業を更に進めることによって、阿含、アピダルマから大乘へ、という線的な展開に思われていたものが、立体的有機的なものへと変貌してくと考えられるのである。